
shadow,lf **もしも奇跡が起きたなら。**

クロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

shadow / if もしも奇跡が起きたなら。

【Nコード】

N3396J

【作者名】

クロック

【あらすじ】

これは、ある不幸な少年が、見事幸運をつかむことができた物語。
(shadow・the・storyのIFになっています)

第一話『悲劇が起きなかった世界』（前書き）

IFの物語は前から書こうと思っていました。

見方次第だと、これがshadowの正規ルートなんです。

ストーリー展開は、なのは本編に沿って進む予定です。

では、皆様あまり期待せずお楽しみください。

第一話『悲劇が起きなかった世界』

人間の歩く道は、時にいくつかの分岐が生まれる。

たとえば、一人の少女が『ケーキを食べたい』と思う、だが、彼女はダイエット中で、食べるわけにはいかないと思う心がある。

結論を言うと、彼女はケーキ食べた。

そのために太ってしまった。

ただ、それだけのお話……。

だが、もし彼女が食べなかったらどうなったか。

太らなかったのではないか……。

このように、人の考えはその時その時で、数多の分岐があるのである。

この物語は、一人の人間が正しい分岐を見つけることができた物語である。

「天気は快晴……雨ならいいのに、戦場も見渡す限り廃墟以外何

も無し……最悪だな」

そう言って肩を落とすのは、真っ蒼な髪が特徴の少年、『灰色の天使』レン・クロフィール、

「ここ、シュミレーターだから、天気が変わるわけではないんだけど」

意外にまじめな突っ込みを入れているのは、女装が無駄に似合う少年、『音速の幻影』ラファイン・セントリア、

「天気が良いことは、きっと良いことだよ」

バカ丸出しの台詞を、元氣よく言うのは、レン曰く不本意な彼女、『撲殺の女神』セシリア・フローゼルである。

99%天然な彼女の台詞に、レンとラファインはため息をつき。

「馬鹿だから、喋るな……」

とテンションの低い声で言うのである。

さて、現在彼らがいるのは、時空管理局本局……の訓練施設。

だが彼らの所属は地上本部独立隊、第七独立武装中隊。

七の数に意味はないが、これまで地上で英雄的活躍を見せた部隊である。

さてそんな彼らがここににいるのには、それなりの理由がある。

「教導隊との、特別演習？」

首を傾げながら、疑問符を浮かべているのは、

第七独立武装中隊、デルタ分隊現分隊長、レン・クロフィール…

…三等空佐。

「正式に言えば、教育ビデオの録画協力だがな、3日後の朝からだ…面倒だから後は頼んだぞ…」

こう、面倒だから頼む…とレンに言っているオッサン。ではなく人物は、この第七独立武装中隊の部隊長、ミハイル・フローゼル一等空佐である。

レンは面倒だと思いつつも、自分の上官であり、師匠である人のことを無視することはできないので

「……はい、分かりました」

渋々、そう答えて部屋を出ようとしたが、レンは少し思ったことがあるのか部屋へ振り返り、

ミハイルに向かって、こんな質問をした。

「ところで隊長、リミット制限はどの段階までですか？」

微笑を浮かべながら、楽しそうに回答を待つレン、その姿に苦笑を浮かべたミハイルだったが、すぐに口を開いた。

「……全開で、叩き潰せ！」

「了解!!」

別命、破壊神師弟……考えたら大体のことが一致してしまうのは偶然である……と思っていた。

これが、レン達がここにいる理由である。

ちなみにビデオの内容が『高ランク魔導士複数相手に、都市の被害を少なく殲滅できるか』なのは、きつと偶然である。

だが以前、中隊に教導官が来たときに、デルタ分隊が教導官を無視したことで恨まれているのは言うまでもない。

「なんで、私たちがこんなことしないといけないんだろうねえ」

「いろいろあったんだ……いろいろ……」

「……………」

セシリアの質問に、少しだけ苦笑しながら、答えにくそうに答えるレン。

決して、兄妹の仲が最近悪いので、刺激してはいけないと考えているのは、きつと気のせいであると願いたい。

ついでに言うと、沈黙はラファインであって、セシリアが怪しんでるわけではない。

『そろそろ時間なんだが準備はいいか……』

ナイスタイミング！ レンはそう考えると、すぐさま『準備完了』の合図を出し、二人に戦闘準備をするように急かし、レンもデバイスを起動し、騎士甲冑をセットする。

レン、ラファイン、セシリアの三人がセットした騎士甲冑は、各個人的なものだが、一つだけまったく同じものがある。

黒きコート……黒衣である。

これはレンがつけていたバリアジャケットをモデルとした、デルタ分隊0番隊の共同モデルなのである。

三人は、その黒衣を靡かせながら、ビルの上で風を受けている。
ちなみにレンは、『本局の設備すげえ』と思っていたのは、また別のお話。

まあ、そんなこんなで始まった合同演習なんだが、
まず、状況を説明しよう。

* レン達は設定では、極悪な高ランク魔道士。

* 教導隊の魔道士は、20名前後……全員がAAAランク以上。

* 戦場は、廃墟都市の設定になっている。

絶対恨まれてる！！ レンはそう考えながら……この設定を見直していた。

ここでレンはふと考えた、『本当にたたきのめして良いんだろうか？ やっぱり、ちゃんと撮影に協力すべきだろうか？』結論を述べると、レンは後者を答えの出そうとしたのだが、

「楽しみだな」

（セシリアのただの鼻

歌です、ただレンには、撲殺 絞殺 滅多打ち と聞こえています）

「

「滅殺、滅殺、滅殺、滅殺、滅殺、滅殺……（念仏に聞こえます）」

「……………」 あれ、命が危ない？ ……

ここのところストレスが溜まっていたセシリアと、戦闘になると何かしら恐ろしいことを呟き始めるラファインを見て、レンは、恐怖で自暴自棄となるのであった。

所変わって、教導隊の面々なのだが、

「叩き潰すぞ！！！！」

『おおおおおお！！！！！！』

教導隊の皆さんは、レンの予想どおり、ものすごいテンションで打倒第七独立武装中隊を掲げていた。

「ところで、今回来ている面々の資料は」

先ほど全員を激励していた、今回の指揮官と思われるこの男は、過去に第七独立武装中隊、デルタ分隊へ教導にきた、教導官である。ちなみに彼を一番無視していたのは、ラファインでもセシリアでもほかの部隊員でもなく、レンであるのは言うまでもない。

「司令官こちらです」

「うむ……。なになに、今回来ているのは『灰色の天使』『音速の幻影』『撲殺の女神』、今日こそ雪辱を晴らす時が来たようだな」

このあと、司令官は高笑いを始めて、テンションが高いはずなのに、それを見ていた部下たちは後に気付いた、笑いながら、恐怖で震えていたことに……

余談ながら、この司令官が、数十分後には表現不能な状態になってしまふのは、気が向いたら別の機会に……。。

レン・クロフィールとエリオット・ラージエスト+ のオールナイト全時空

レン

「帰って参りました。Q & Aのときのコンビ、レン・クロフィールとー!!」

エリオット

「エリオット・ラージエストでお送りします」

レン

「始まったな、IF企画。これは無謀な作者が、どうしても書きたいからと始めてしまった無謀企画です!!!」

エリオット

「基本無謀と理解してやっているので、生温い目でご覧くださいと作者は……」

レン

「鳥肌をたたせて、ビビりながら執筆をします」

エリオット

「ところで気になることがあるんだけど……」

レン

「どうした、エリオット？」

エリオット

「+ っであるけど、いったい誰が来るんだ」

レン
「じゃあとりあえず、今回の＋は、音速^{ソニック}の幻影^{ビジョン}の二つ名が似合わない、ラファイン・セントリア君です」

ラファイン

「どうも皆様、ラファインです!!」

エリオット

「年をとって……こんなに髪の毛が」

ラファイン

「ハゲてない!!ハゲてなんか無いよ!!」

レン

「……………（目を逸らしてます）」

ラファイン

「ねえ、レン、沈黙はきついからやめて!!」

レン

「うん、そうだね…… やっぱり目を合わせない」

ラファイン

「だからレン、おれの眼を見て言ってよ!!」

エリオット

「さて、ハゲはほつといて、コーナー『ラファインの趣味発掘』を始めたいと思います」

ラファイン

「ねえ、ちょっと待って、それって僕がひどい目にあうコーナーじゃないの」

レン&エリオット

「……………（ものすごく笑いをこらえて）」

ラファイン

「……………もういいや。それで僕は何をすればいいの？」

レン

「この紙に書かれた、『ラファインですら、できる簡単な趣味ベストX』の中から、選んでやってみようと思うのだけど……」

ラファイン

「なに、その僕の人権をほぼ無視したような物は……！」

エリオット

「作者の有名な著書（嘘です）」

レン

「とりあえず一番最初にして最後の項目は……」

ラファイン

「少ない……！異常なほどに少ないよ！」

レン

「ラファイン、うるさいよ……。では、早速やってもらいましょう、ラファイン・セントリアで『逆立ちしながら、ピアノを弾く』」

です。どうぞ……」

ラファイン

「できるか！……！」

レン

「ラファイン……そこはノリで弾こうよ……」

エリオット

「ヘタレ……他作品のヘタレーズ達を上回る、ヘタレっぷりだな」

ラファイン

「僕、何か悪いことした！？ 至って普通の反応だよね」

レン

「ヘタレはみんな同じことを言う」

エリオット

「ラファイン……失望したぜ」

ラファイン

「失望する所じゃないから！！ まじめな反応をただけだから
！……って、二人とも聞いているんですか！……！」

レン&エリオット

「「そろそろ放送時間のほうもわずかとなりましたねえ」」

ラファイン

「無視しないで……！！……！」

レン

「次回はどのようなゲストの方がきてくださるのでしょうか？」

エリオット

「ゲスト召喚してほしい、またはしたいという方は、郵便もファックスもいりません、感想かメッセージで作者にお伝えください」

レン&エリオット

「また次回、お会いできることを心より楽しみにしております」

第一話『悲劇が起きなかった世界』（後書き）

さて、Lightのように、2カ月一回更新にならないように頑張ります。

感想、意見、お待ちしております。

第二話『出向任務前夜』（前編）（前書き）

取りあえず第二話です。

ゲストの予定があるのですが、時間の都合上、次回に回します。申し訳ございません。

第二話『出向任務前夜』（前編）

第七独立武装中隊……それは管理局で、ある程度発言権を持った権力者にしか、隊への指示どころか、隊舎の位置すら教えてもらえないなど、完全秘密主義をとっているエリート部隊、後見人は、レジラス・ゲイズ中將になっている。

地上の部隊に所属するが、部隊長ミハイルが前に聖王協会の騎士団の騎士団長していたことがあり聖王教会との関係が親密である。

デルタとアルファの二つの部隊を合わせた中隊、だが実際は人数的に大隊に含むべきとの声が多いが、隊長がいつまでも、大隊指揮が取れないため、今現在は保留……。

「なかなか面白いことになってるぞ」

そういうのは、部隊長のくせにサボリ症のミハイル・フローゼル。そして言葉を聞いているのは、アルファ隊副官、エリオット・ラージエスト三等空佐、彼は状況を見てこう述べる。

「取りあえず、面白いのではなくて、ヤバイことになっているのでは？」

そんな会話をしている。エリオットとミハイルが見ているのは、

三日前本局で取られたビデオである。

ビデオの内容は、当初の予定のものとは大きく異なっていて『少数のエースが、大部隊を殲滅する様子』となっている。

映像を見ると、レン、ラファイン、セシリアの三人が、本局の魔導士を吹っ飛ばしている画が映っている。

エリオットは『何やっているんだ……？』そう言っただけ息をついていたが、ミハイルはこう言った。

「あいつらは、陸と海の決定的な壁を取り払っているんだ」
「……………??？」

エリオットは疑問符を浮かべながらその言葉を聞いた。
ミハイルは、『分からないか……それも仕方ないか』そう呟くとある資料を出した。

その書類には書いてあったのは『第七独立武装中隊より、機動六課への特別出向選抜』この書類の所為で、とある事件が勃発するのは別のお話。

「ああ、やっと帰ってこれた……」

悲痛なる魂の叫びをあげているのは、レン・クロフィールとラファイン・セントリアの二人。

彼ら二人は、恐ろしき二つ名の通り、本局の訓練施設で大乱闘をしてきたのだが、もう一人の馬鹿……もとい、セシリア・フローゼルが、力任せにぶっ壊した設備を、三日かけて修理してきたのである。

「ただいま〜」

ただ一人だけ、セシリアがとても元気なのは、機械についてはさっぱりだから「馬鹿だから何もできなかったからである」。

「……………」

レンとラファインは、『いつか覚えておけよ……』と心の中で思いながら、顔では平静を装っている。

「遅かったんですね……三人とも……」

少し声を低めにした、お嬢様口調で、威圧するようにしゃべっているのは、レイチエル・シュリーク。

第七独立武装中隊の中で、ある意味最も個性的なキャラを持つ、リアルお嬢様である。

「ああ、いろいろあつたんだ。いろいろ……」

レンは、ものすごく疲れたと言わんばかりに、全身を脱力させてそう言った。

それを聞いた、レイチエルは、

「それは大変でしたのね……」

「それはもう……言葉では言いたくないほどに……」

「……………」

この二人の会話は、長く続かない。

先にどちらか一方が、会話の流れを止めてしまうのである。

これは決して仲が悪いわけではなく、口数が少ない彼ら二人ならではの課題点といったところだろう。

「それでレイチエル、お前が出迎えに来るっていうことは、呼び出しか？」

「ええ、そうですわ」

それを聞くとレンは、かなり嫌な顔をしながら、少し熟慮した後。

「取りあえず、部屋に戻って荷物を片づけてからでいいか？」

「そのくらいなら、許されると……… 思いますわよ」

レンとラファインは、『 思いますわよ』の言葉を少しひっかけながら、彼らは部屋へ向かった。

ちなみにセシリアは、レンとレイチエルが会話をしている間に、どこかに行ってしまったているのは黙認していいのか悪いのか分からない、事実である。

「入りたくない……なぜだろう?」

「ラファイン奇遇だな、俺もなぜか入りたくない」

かれこれ扉の前で20分、ラファインとレンがものすごく嫌な顔
……門限を軽く3時間くらい飛ばしてしまった子供のような顔を
して、肩を落としている。

「ラファイン、上官命令だ。開けてくれ」

「レン分隊長、上官らしく堂々と……」

こんな会話を28回ほど繰り返して、さすがに疲れてきたレンが、
『ええい!!どんな風にでもなりやがれ!!』と言って、思いつ
きり扉を蹴り飛ばした。

扉を蹴り飛ばしたレンが見たのは……真っ青な顔で、真っ白な目
で書類を見ているエリオットの姿があった。

約20分くらい遡る。

レンとラファインが『お前が開ける!!』と言い合っている20分の間、こんな会話があった。

「エリオット、この資料を見てくれ」
「なんですか？」

エリオットが見ているのは、古代遺物管理部機動六課への選抜出向人選、条件項目。

- * 第七独立武装中隊、0番隊より選抜すること。
- * 公式の記録でSランク以上の魔導士にすること。
- * 前線での指揮ができる、中隊指令資格所持者にすること。

「部長。これはいったい何ですか？」
「何って、読めばわかるだろ？　なんかカリムちゃんに頼まれて、うちから機動六課って部隊に、メンバーを送ってくれて頼まれてさ」

エリオットは、なに考えているんだ？この馬鹿野郎!!……………。
って本気で口を滑らせそうになったが、声になる手前でギリギリで抑えた。

そして、できる限り自然な言葉で、話そうと努力し、
かなり口を滑らせそうになりながら、質問をすると…………

「……………なに考えて、いらっしゃるのでございますか？」
「なにも考えてない。頼まれたからそうした」

その言葉を聞いて、エリオットは数秒間、何度も頭の中でこの言葉を繰り返し、

そして完全に意味を理解したところで、こめかみに青い筋が立ち始め……。

さらに十秒後、現在の隊の状況を思い出し、何かしらのテロ事件が起きた場合の状況を考え初めて……約五分後。

最後に送ってよさそうな人員のことを頭の中で考えること、十五分。

頭の使いすぎでパニックになっているエリオットの顔は、見るに堪えないほど真っ青になっていた……ついでに目も白く……。

そのタイミングで、レンが扉を蹴り飛ばしたのであった。

「エリオット！その顔どうしたの！？」

真っ青な顔をしているエリオットを見て驚いたラファインが呼びかけ、すぐに駆け寄る。

「
x ? @ x ! ! !」

エリオットは何かを喋ろうとしていたが、もはや同様のし過ぎで、言葉にすらならない。

レンは、エリオットが先ほどまで読んでいた書類を拾い、その内容を読むことでエリオットがどうしてこのようになったかを理解した。

そして彼は、現在の部隊の状態などを冷静に判断して、部隊長ミハイルの話しかける。

「師匠。遅くなつてしまい申し訳ありません……挨拶はここまでにして、一つお聞きしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「おう！なんだっていいぞ！」

青ざめているエリオットを見ながらレンは、取りあえず発音を間違わないように丁寧な言葉で述べる。

「とりあえず現状を見る限りでは、この部隊からの出向可能な人数は4人ですが、非常時の緊急出動を考えると、その中から半数の二人を出すことが最適だと思います。あと出向可能な人員ですが、ここにいる三人が、任務中のジュリアですので、可能なのはこの三人だけです」

長々とここまでしゃべって、レンは一区切りして最後にこう述べる。

「そして、俺はデルタ隊の司令官として動くため忙しいので、両分隊の副隊長を出すことをお勧めします」

これは最良の案だと言わんばかりのレンは、自信満々で堂々と自分を枠外に外す。

それを聞いていた、ミハイルは、こう感想を述べた。

「それはいい考えだ！！では、うちの部隊からの出向は……」

普通の考え通りなら、ここはエリオットとラファインとなるが、このミハイルという男は、少々普通の人間とは違う考えを持っている為か、こんな結果をもたらした。

「……エリオットとレン。お前たち二人だ!!」

突然の返答……いや、それ以前にレンが言っていたことと全く関係のない回答を出したミハイルの発言に、レン、エリオット、ラファインの三人は思考回路を約五秒停止させたうえで、三人同時に間抜けな声で……。

「「「はい!?!」」」

目が点になっっている三人だったが、レンは……レンだけは、自分の身に降りかかる可能性がある予測が立ったため、それを防ぐため全力で思考を回復させ、大声で……

「なんで!! そうなるんだよ!!!!」

ものすごくツツコンだ。

レンからの言葉を聞いたミハイルは、『なんでって言われても……』と呟きながら、こう答える。

「得に理由はない」

「!!!!」

この野郎……馬鹿だと言っても限度があるだろ!!とレンは……言ってしまった。

「この野郎……馬鹿だと言っても限度があるだろ!!」

「おい!!俺は一応、お前の上官なんだが……」

「知るか!!馬鹿に馬鹿といって何が悪い」

「バ……力……?」

馬鹿と何度も言われたミハイルのこめかみには、かなりの青筋が立っていた。

その状態のミハイルに、レンは追い打ちをかけるようにこう言った。

「さつきから言ってるだろうが、この馬鹿師匠!!!」

「……………」

それは一瞬だった。

現最強の騎士ミハイル・フローゼルは音もなく。

机を隔てて暴言を吐いていたレンを、壁に埋めた。

それも圧倒的な腕力で……………。

埋められたレンに意識が残っているわけもなく……………わずかに見える右腕が、力なく垂れていた。

「エリオット、明日からレンと出向だが。別に問題はないな」

「……………全く御座いません」

エリオットは冷や汗をかき、視界から消えたレンを見てそう答える。

ついでに言うと、ラファインはレンを壁から抜こうとしたが、抜けなかったそうだ。

名前：レン・クロフィール

『灰色の天使』

年齢：17歳

身長：176・7cm

体重：57kg

誕生日：2月3日

出身：第97管理外世界地球極東地区日本国海鳴市（発見された地点が）

階級：三等空佐

血液型：AB型（名義上であるため、実際は不明）

利き腕：右

好き：苦い物、コーヒー、ビターチョコ、模擬戦、思い出、格闘技、剣術

嫌い：甘いもの（ある程度、食べられることができるようになった）、紅茶、レモンティー、バカ、自らの正義を押し付ける人、管理局の偉い人、セシリア？

趣味：格闘技、読書、ギター、キーボード、ピアノ、歌

容姿：蒼髪〔純度の高い青〕黒い瞳

魔導士ランク：空戦SS（非公式では、SSS++測定不能）

希少技能：多重術式、魔力分解、月光唱、模倣、ete...

魔力変換資質：凍結

デバイス：シャドウ・ライト

シャドウ・ライト詳細データ

使用術式、古代ベルカ式+ミッドチルダ式+???+????

戦闘形態：剣、双剣、拳銃、狙撃銃、旋棍、杖、ete...

待機状態：両腕に腕輪

モード形態：6つ

フォーム形態：1：ウェポン、2ブラスト+エンジェル、3ブレ

イカー……。

名前：エリオット・ラージェスト

『煉獄の死神』

年齢：17歳

身長：177・1cm

体重：61kg

誕生日：11月18日

出身：第一管理世界ミッドチルダ西部アルトセイム

階級：三等空佐

血液型：O型

利き腕：右

好き：甘いもの、紅茶、レモンティー、模擬戦、レン、その他同僚、ベース、歌

嫌い：苦い物、ビターチョコ、コーヒー、ゴーヤ

趣味：走ること、遊ぶこと、魔法の術式調整及び新しい公式の研究、格闘技、ベース

容姿：銀髪、碧眼、ショートヘア

魔導士ランク：総合S+（非公式では空戦SSS++規格外）

希少技能：無

魔力変換資質：炎

デバイス：フォルス

フォルス詳細データ

使用術式、ミッドチルダ式（インテリジェントデバイス）

戦闘形態：機械的な杖、鎌、剣

待機状態：1；携帯電話、：2、杖

モード形態：5つ

フォーム形態：1、ジュエル 2、ルイン 3、デス+？……。。

第二話『出向任務前夜』（前編）（後書き）

現在キャラクターの募集をしております。

詳しくは、活動報告に書いていますので、興味のある方お願いします。

第二話『出向任務前夜』（後編）（前書き）

ほとんど一日で書き上げた。

誤字脱字については、報告してくださるとありがたい。

バトルは、真面目に書くのは初めてだったので、変えたほうがいいところのアドバイスをお願いします。

おまけは。最早適當……

どうぞ、お楽しみください。

第二話『出向任務前夜』（後編）

真っ白なカーテン。

真っ白なシート。

ここまでは白くていいのだが、そのインテリアからは想像できないような……漆塗りのように真っ黒に染められた壁のある部屋。そんな部屋の中でレンは目覚めた。

「ここは……どこだ……」

レンはふらつく頭を押さえながら、ゆっくりと起き上がる。そして記憶の途切れる手前の部分を思い出そうとした瞬間。

「……………！！」

突然の激痛！！

正確にいえば、動いたために体のバランスがズレ、寝ていた状態ではかからなかった負荷がレンにかかったため、激痛が来たのだが……いや、それ以前に壁にあり得ないほどの速度で叩きつけられたのだから、体が痛まないわけはないのだが。

レンは、その痛みを強制的に無視して起き上がった。
何故なら……。

「おはようございます。レン君」

「おはようございます……コンテさん」

そうここは、見た目からは想像できないが、たった一つしか第七独立武装中隊には存在しない。生存率100%の医療魔導士がいる医務室。

そんな場所なのだが、レンは怯えている。

逃げ出そうとした理由になるのだが、それは……。

「取りあえず、骨折している所を繋ぎますけどいいかな……」

「……………コンテさん。怖いです……………顔が」

普段は童顔で、心優しい先生なのだが、このようにふざけた理由で怪我をしてくと般若の形相で、治療してくれるので、心の弱い人間なら一発で病院行きだ。（ここも病院みたいなもののに……）

「取りあえず、骨折の治療をするけどいいかな……」

「いいです……………遠慮させていただきます……………」

「取りあえず、骨折の治療をするけどいいかな……」

「……………どうぞ」

レンは、力なくそう言った。

その言葉を聞いた般若^{コンテ}医は、容赦なく、物凄くいたい秘伝の方法で、骨折していたレンの骨をすべて繋げた。

その後、第七独立武装中隊の隊舎中に響くレンの絶叫が聞こえたのは……………哀れすぎて書けない。

先ほどの絶叫から、軽く一時間ほど経った、第七独立武装中隊、『デルタ分隊』のデスクでは、レンとラファインの二人が、机の上に天井に届きそうな書類を積みながら雑談をしていた……仕事と共に。

「骨は繋がっているのに……体が痛い」

「自業自得。仕方ないんじゃないかな、あそこであんなことを言わなければそんな体にはならなかったのに……」

レンは、ラファインの的を射た言葉に少しだけ、この野郎……と感じたがその感情を目の前の書類を見て、すべて無に帰す。

そして、口調もいつもと変わらない平淡な声にして、事務的な内容を話し始める。

「それについては、何も言えんのだが……。そんな事より、これではらくの書類の整理はしなくてよくなったか？」

「うん、デルタ隊からいろんなところに言っている隊員にも連絡したからこれで終わりだよ」

「それは良かった……」

そう一拍置いて、レンは完全に脱力しながらこの一言を加えた。

「あとは、アルファ分隊の書類をまとめればいいんだな……」

「そうだね」

「俺……確か、明日から出向だった気が……」

「そうだね」

「荷物の整理……これが終わってからするのか……」

「頑張っ……」

彼らの終わらない夜は長かった…… AM 1:20

AM 4 : 5 0

「終わった……色々な意味で、終わった……」

「……………（仮眠中）」

あれから約三時間、二人は全力で作業に取り掛かった。

たださえ、人数の多い部隊の全員の状況を確認、そして、仕事の指示などを書いた割に三時間で終わったのは奇跡と言っても過言ではあるまい。

「ラファイン……………眠りやがって……………」

さすがに、ものすごい疲労と睡眠不足の所為か、レンの活動は停止寸前まで追い込まれている。

だがレンは、最後の力を振り絞って部屋に向かった。

何故なら……………。

「荷造りをせねば……………」

何故なら、出向の日時は、本日5月15日、午前10時なのである。

そんなこんなで、レンは部屋に向かう。

そんな彼に更なる悲劇が襲いかかる。

「こんな時間に何をしてるの？」

レンは背後から聞こえた声に、ゆっくりと振り向く。

そこには、栗毛でロングヘアー、顔立ちはレンにそっくりな美形、そして何よりもある部分が平坦な少女、一歩間違えたら、確実に少年と間違われるかもしれないのだが、レンが女の子に間違われるのでそれはあまり気にならない。

そんな不憫な少女の名前は……。

「ジュリア……戻ってきたのか？」

「うん、数時間前に戻ってきたよ」

それだけの会話なはずなのに、レンはテンションがどんどん下がっている。

そんなレンへ、ジュリアはこう問いかける。

「なんで、あんたはそんなに疲れているの？」

「明日から、俺とエリオットは出向だから……」

その瞬間だった。

興味深そうにレンを覗くジュリアは、一瞬で表情を変えると、か

なり驚いた顔でレンに訪ねた。

「出向ってどういうこと……！」

その声はとても大きく、睡魔に襲われていて意識が少し飛んでいたレンを、現実に取り戻した。

そして、現実の引き戻されたレンは、言葉を選びながら答える。

「出向ってのは、カリムお姉ちゃんにうちの馬鹿が頼まれて、機動六課っていう部隊に二人くらい出向させることになって、暇なエリオットと忙しい俺が選ばれたってわけだ」

「あの女……」

「あの……ジュリアさん」

そうレンが問いかけると、何かを閃いたようなジュリアは、レンに大声でこう告げる。

「レン……！ 今からアンタと私で模擬戦するわよ……！」

「な、なぜに……」

「そして……あたしが勝ったら、エリオットの代わりにレイチエルでもセシリアでも連れて行きなさい……！」

「いや、だからね……」

「あんたが勝ったら、エリオットとデートに行くのを許すから……！」

「俺に得が無い……！！」

隊長の命令やら、レイチエルとセシリアが無理な事……それ以前に、勝った時の代償を考えると、絶対、戦いたくないレンだったが、色々と言ひ訳を考えてジュリアに話そうとした瞬間。

「ジュリア、さつきから言っていると……」
「問答無用！！！」

明け方の第七独立武装中隊で、恋する乙女の誇りと不幸少年の不幸が激突する！！

第七独立武装中隊隊舎より北西1?の位置にある、訓練場。

聖王教会の持ち物であった、古いコロシウムを、そのまま再利用しているため土地代などはタダだし、丈夫だし良いこと尽くしな建物だが、防音設備だけは無いらしい。

過去に何度か破損している。

そんな歴史学者もビクリな建物の中で、史上最悪の理由によって始まる決闘が行われる。

感染者はいないそんな中で、アカコーナージュリア アオコーナーレン
って、こう言う。

「準備はいいわね！！」
「……………はい」

いいえ、死にたくないです。ここから逃げたいです。
そんな本音はさて置いて、レンは溜息をつきながらシャドウ・ラ

イトを起動させる。

「シャドウ・ライト、1stモード ウェポン・ガンナー」
(了解です)

レンの手に握られるは、白と黒の二丁拳銃、レンの基本戦闘形態である。

だが、それを見たジュリアは、少し不機嫌そうに言う。

「あたし相手に、手加減なんていい度胸じゃない」

「……………手加減か」

そう自嘲気味にレンは呟くと、少しだけ感情が抜けた表情を見せながら、銃を構える。

その銃口の先に、ジュリアを置くとレンは再度呟いた。

「……………訓練では本気を出せない、昔は調子に乗って本気中の本気を連発していたつもりだが、2年前の事を思い出すと、恐怖で身が震えるんでね……………」

レンにいったい何があったのか、その事件のとき行動を共にしていなかった彼女には理解はできないといった表情だったが、レンは気にすることも無く、最後につなげる。

「魔導士に必要なものは技量、そっちのほうは本気でやるから安心しろ」

「……………分かった」

この二人の会話はここまでだった。

そして二人は、数秒間の静寂に身を任せると、お互いの武器を目

の前に掲げる。

「頼むぞ、光影の剣、シャドウ・ライト!!」

（任せてください、マスター）

「行くわよ、勝利の弓、ペルセウス!!」

（Full victory is primarily of
完全勝利を、主に捧ぐ）

この名乗り上げと共に、史上空前の理由から勃発した模擬戦は始まった。

「（シングル・バレット!!）」

三回の炸裂音。

ただ広いコロシウムの中では、あり得ないほどに響いている。

放たれたのは、灰色の銃弾。

撃ち手はレン。

右に握られた黒いデバイスから、まっすぐにジュリアを狙い、放たれた。

だが、その射線上にいたジュリアは、全く気にすることなく弓を構える。

彼女の手元には、目がくらむほどの光を放った矢が置かれている。そして限界まで弓を引くと、レンのはたった魔力弾を直指して、矢を放つ。

「行きなさい。光の矢、ライトニング・アロー!!」

そう言われて放たれた矢は、間近に接近していた、灰色の魔力弾を撃ち抜き、

恐るべき速度で、レンを狙う。

「(ソード・バレット)」

レンは、すべての魔力弾が打ち抜かれた事を確認すると、射撃戦は不利と考え、戦闘スタイルを切り替える。

二つの銃口から現れた剣の長さは、60?弱。

左腕の白き拳銃を少し後ろに引くと、その刃を振るい、自らに迫っていた光の矢を、ギリギリの所で叩き落とした。

だが、落としきれたはずのレンの顔は険しかった。

そして、状況が芳しくない事を拙いと思ったレンは、シャドウに作戦の変更を告げた。

「シャドウ。接近戦に変更する」

(兵装はこのままで宜しいですか?)

「ああ、行くぞ!!」

その様子を見ていたジュリアは、レンが何かを仕掛けてくると考え、すぐさま次の一手を放った。

「撃ち抜く羽の矢よ、舞え!! フェザー・アロー」

彼女の手元には、5本の矢が現れた。

そして彼女が弓を横にし、その矢をすべて同時に放つと、すべての矢は複雑怪奇な動きをしながらレンを襲った

接近しようと、構え一気に距離を縮めようとしていたレンは、その矢を見て表情をさらに険しくすると、迫りくる矢を撃ち落とそうと左腕の白き銃の刃を消し、

シャドウ・ライトを構えるが、複雑な動きをする矢を捉える事ができず、レンは防御に切り替える。

「（ライト・ウイング）！！」

その掛け声とともに、レンの背中からは一翼の翼……純白の翼が姿を現す。

純白の翼は、レンを狙っていた5本の矢が当たると、音も無く消し去った。

「よし！！」

先ほどの矢の影響で、砂埃が舞い上がり、視界の状況は最悪となった。

それを好機と見たレンは、ジュリアに悟られぬように術式を発動させる。

（六式転移陣）

一瞬で足元に転移用の術式が現れると、レンは目測と予想でジュリアの座標を計算し、その背後に来るようにセットすると、すぐさま転移した。

レンの完全勝利……………の
はずだった。

レンが転移した先で、銃を構えて撃ち抜くはずだった。
だが、彼の視界に移っていたのは、銀色の弓に真っ黒な矢をセツ
トし、自分を目の前で狙っているジュリアだった。

「ダークネス・アロー……………」

その声を聞いたレンの時間の流れは、何十分にも何時間にも思え
るほどであった。

そしてその時は着た。

限界まで弓を引いていた手は、離され。

その瞬間、真っ黒な矢がレンを撃ち抜いた……………。

「案外、アツサリ勝てるものね」

そう軽く吐き捨てるジュリア。

レンとジュリアの対戦回数は異常に少ない、それに加えてここ数年は、模擬戦をやった事がなかった為、彼女はもう少し苦戦することと考えて、いくつか手を用意していたのだが、こうも簡単だといろんな意味で取り越し苦労だと考えた。

「まあ、良いか、明日からエリオットと一緒になんだから」

ほんの少し、うわの空気味に彼女は言うど、瓦礫に埋まっているであろうレンを無視して、出口へと歩き出した。

「……………2ndフォーム（ブラスト）」

ジュリアは、体全身に鳥肌が立っていた。

背後の瓦礫の中からは、かなりの魔力と殺気が感じられる。

そして次の瞬間……

「デルタ・バレット……!!」

その声と同時に、灰色の閃光がジュリアが見ていた瓦礫を吹き飛ばし、破片を彼女へと飛ばす。

そして、ほとんど無くなった瓦礫の山の中からは、淡く灰色に輝くレン・クロフィールの姿があった。

「さっき本気は出さないって言ってなかった!？」

そう言うジュリアの問いに、レンは少し笑いながら答える。

「これを本気って言うのか？ 確かに魔力の消費と力についてはフルドライブやリミットブレイクより上だが、本気ではないと思うぞ、多分だけどね……」

そう言うてレンは、軽く頭から血が流れている事に気づきながら、再びシャドウ・ライトを構える。

そしてジュリアもペルセウスを構えた……その時だった。

「お前ら……朝方からうるさいんだよ!!」

その声の主は、この戦いの間接的原因のエリオットだった。

レンは、エリオットに『黙ってる、まだ模擬戦は終わってないんだ』と言おうとしたが、

その前に……

「エリオット……ごめんね。もう止めるから……」

ジュリアが戦意を喪失したため、この模擬戦は引き分けに終わった。

この結果がレンにとっては、一番まともなものだったのは、誰が見ても異論はあるまい。

そしてそれから二時間あまりして……………。

「眠いんだけど……………」

「諦めろ。お前が招いた結果だ」

第七独立武装中隊のある山の奥から、車で少し出たところでレンは助手席に座りながらエリオットに話す。

だがエリオットは、簡単に流すとすぐさま運転に集中する。

朝方の出来事後、レンは、仮眠を取ろうと部屋に戻ったのだが、そこで大事な事に気がついた。

俺……………今から荷造りしないと！！

本来の用事を、ジュリアの邪魔されていた事を思い出したレンは、急いで準備をした。

必要なもの、必要なもの、必要じゃないもの、必要なものなどを荷造りしてレンは、車のトランクに乗せた。

そこまでが今現在までの、レンの行動である。

レンはエリオットが話してくれないので、睡魔に負けそうな思考を取りあえず、書類に向けた。

その書類には、こう書かれていた……。

『……機動六課出向隊員名簿。レン・クロフィール二等空尉 エリオット・ラージエスト二等空尉……』

レンは、一瞬自分の目を疑い、そして自分の頭を疑ったが何度見ても文字は変わらない……。

少しパニックになりながらもレンは、エリオットに聞いてみる。

「エリオット……。これは俺の目が悪いから二等空尉に見えるのか？」

「お前……いきなり何を言いだすんだ!？」

そう言つて、睡眠不足の所為かレンもおかしくなつちまつたな……的な目でレンを見たエリオットだったが、書類のとある部分が目に入るとエリオットも答えた。

「いや……間違つていない。あの馬鹿野郎が、俺たちの階級を書き間違えたか、故意に変えたつて所だろう……」

そして数秒の沈黙が流れた後で、二人はほぼ同時に同じ判断を下した。

「戻るぞ……」

この後、第七独立武装中隊の隊長室を襲撃した二人だったが、馬鹿と言ってしまった為、壁に埋められた拳銃、壁を貫通して地面にたたきつけられて、医務室送りにされた。

その医務室では、般若の顔をしたコンテが、彼ら二人が起きるの

をずっと待っていたそうだ……。

ついでに二人は、AM10:00までに機動六課にたどり着けたのかは……次回の楽しみに。

レン＋エリオット

「レン・クロフィールとエリオット・ラージェストのオールナイト全時空!!」

レン

「おまけは久しく書いていないので、何が起きるかわからない……作者からの注意書きでした」

エリオット

「時間がないから、ゲストを呼ぼう。魔法少女リリカルなのは留まらない流れより」

レン

「村雨流留さんです、ではこちらへどうぞ!!」

流留

「どうも。村雨流留です」

レン

「作者も面倒だと思ったからって……適当にするなよ……」

エリオット

「キャラクターの個性をどう表現できるかが重要なのに、これでは失敗だな」

レン

「やはり個性を書きやすくするなら、イユさんのほうが楽だったかな……」

エリオット

「それはまた後日にするらしい、機会があつたなら……」

流留

「おい!!」

レン

「スマン、完全に無視しかけてた」

流留

「無視しかけてたって、無視したのか？無視してないのか？」

レン

「中間地点？」

エリオット

「やはり突っ込みだけでは話が進まないみたいだな……」

レン

「それには同意だけど、今からヘタレを出すの？」

流留

「ヘタレって、どんな奴だ・・・」

レン

「えっと……逆立ちしてピアノが弾けない奴……」

流留

「引ける訳ないだろ……普通に考えて」

レン

「まあ、それを言ったらそうなんだけどね……一応、そういうコーナーだったし」

エリオット

「コーナーを考えた作者に文句を言って、ラファインを励ましてやってくれ……」

流留

「お前たちって、薄情者なんだな」

レン&エリオット

「……………」

流留

「凶星か」

レン

「……………さて、宣伝の時間です！……」

エリオット

「今回宣伝する作品は、流留君が主人公の魔法少女リリカルなのは 留まらない流れ です」

レン

「JS事件が終わって一年後、悪用されたロストログアの為に復活した機動六課。そんなタイミングで忙しい八神はやてが、一人の男……村雨流留と出会った為に始まった物語」

エリオット

「以下略」

流留

「そこは、略しちゃダメだろ」

レン

「突っ込み禁止……さて今回の放送はここまでです」

エリオット

「次回はどんな方が来てくれるのでしょうか？」

流留

「おい、人の話を……」

レン&エリオット

「では、次回をお楽しみに……!!」

流留

「だから……（残りは放送時間外）」

第二話『出向任務前夜』（後編）（後書き）

次回から、第一部、六課編スタート

おまけは少しだけ後悔しているが、気にしてる余裕がなかったので……以下略。

感想、ご意見、文句、お待ちしております。

次回のゲストは誰だろうか？

第三話『機動六課出向』（前編）（前書き）

若干犯罪が、エリオットが変態に……

第三話『機動六課出向』（前編）

『航空魔導士隊からの特別出向隊員名簿』（前回、レンが最後に行っていた資料です）

名前：レン・クロフィール

年齢：17歳

身長：176・6cm

体重：57kg

誕生日：2月3日

階級：二等空尉

所持資格：戦技教官、小隊指揮官（実際は大隊指揮官）、バイク免許、特殊デバイスマイスター。

魔導士ランク：古代ベルカ式、空戦S

希少技能：多重術式

魔力変換資質：凍結

デバイス：シャドウ・ライト

名前：エリオット・ラージエスト

年齢：17歳

身長：177・1cm

体重：61kg

誕生日：11月18日

階級：二等空尉

所持資格：戦技教官、小隊指揮官（実際は中隊指揮官）、普通自

動車免許 A級デバイスマイスター。

魔導士ランク：ミッドチルダ式、総合S+

希少技能：無

魔力変換資質：炎

デバイス：フォルス

さわやかな風、青い空、空高くに上っている太陽。
そんな最高の天気の中に、絶望に打ちひしがれている二人の姿があった。

「ヤバイ、遅刻では済まされないぞ」

「俺は……行きたくない」

彼ら。レンとエリオットが見ているものはとても大きな建物……
時空管理局古代遺物管理部機動六課の隊舎なのだが、彼らは一向に入ろうとしない。

それもその筈、現在の時刻は午後1時過ぎ、本来は午前10時には着いていなければならなかったのに、彼らは三時間の遅刻である。

「取りあえず、コッソリ入って、迷子になっていた振りつてのはどうだ？」

「目の前に入口があるから迷子は無いだろ、普通は……」

エリオットが考えた言い訳を、一瞬にして看破するレン。
そんなレンに対して、エリオットは次のように話を振る。

「じゃあ、レン。 お前だったらどうするんだ!？」

少々、言葉を強くしながら、レンに意見を求める。
少し明後日の方向を向きながら、考え始めるレン。
だがすぐさま考えがまとまったのか、エリオットのほうを笑顔で
見返す。

「名案がある……」

少し意外だと言った顔で、レンを見るエリオット。

レンの浮かべていた笑みは、なぜか少し崩れていたが、エリオットは気にせず聞いてみる。

「名案って、なんだ？」

「……………素直に謝る」

「それ、名案でも何でもないだろ!？」

レンが言った当たり前のことを聞いて、エリオットは思いつきり
ツッコミをいれる。

だが、レンは何とも言えない表情でエリオットに文句を言っていた。

「エリオット……」

「なんだよ!？」

「俺を叩くのは自由だが、お前もなにも思いついていないのだから文句を言われる筋合いはないと思うんだが……」

「……………」

レンの言葉に、何も言えなくなったエリオットは、黙り込んで明日の方向を見る……。

その様子を見て、レンは若干ため息をつきながら、エリオットとは反対の方向に、無意識に目をやる。
その瞬間だった。

「桜の………木？」

レンが見たものは、彼が失った幼き日の記憶の欠片に残っていた薄い桃色の花を散らせる木……それを見た、レンの視界と思考の両方はその木の存在で埋め尽くされた。

数分。

数十分。

そんな時間が過ぎるのをレンは感じた。

自らの記憶にない、幼き日を思い浮かべる事が今の彼にはできそうだった……。

だが、時間の流れと、友の存在がそれを阻んだ。

「レン、いつまで思考回路を停止させる気だ……」

若干自暴自棄気味なエリオットは、何度話しかけても無反応なレンの頭を、少し戸惑い気味に叩いた。

その為、思考の海にダイブしていたレンは、飛躍的に意識を呼び戻された。

その後、後ろを振り返ったレンは、目線の先に一台の車とその上に乗っている、確かこの部隊の部隊長らしき人と小さな少女を目にした。

「…………エリオット」
「どうした、レン？」

そんな会話の間に、車はレンの視界から外れ、車は先ほど彼らが通ってきた元を進んでいく。
若干呆然としながら車を見送ったレンは、半分気の抜けた声でエリオットに話しかける。

「いや…………たった今通った車に、この部隊の隊長さんがいた気が…………」
「どの車だ！！」

レンの言葉を聞いて、咄嗟に後ろを振り向いて道に出るエリオット。
しかし、もはや見える範囲に車は無く…………見渡す素振りすら悲しく思えてくる。

意気消沈しているエリオットは、かなりテンションを下げた状態でレンにエリオットは…………。

「どうする…………？」

そう言われたレンの方は、物凄く困った顔をしながら数秒ほど思慮して、

すぐさま、妥当と思われる案を出す。

「取りあえず…………早く行ったほうがいいんじゃないのか？ もしかしたら、俺たちが何時まで経っても来ないから、搜索されてたりしてるかもしれないし…………」

若干悪ふざけの入ったレンの言葉、彼は、実際に探すなら申し出に見つかっているはず、と思っっているのだが、

エリオットはこの言葉を真に受けてしまったらしく、『今更ながら、怒られるのは嫌だ!!』と言って走って行った。

「なんであいつは、余計ややこしくなる方を選ぶんだ？」

若干の疑問符をつけながらレンは、エリオットの後をゆっくり追いかける……。

この後、悲惨な目に遭うことも知らないで……

若干時間を進めて、もうお昼時を完全に過ぎたところ……。なぜか迷子が悪化している二人がいた……。

「「ここは、どこだ!!」」

右を見ても左を見ても、部隊の隊舎が見えるのはいい……。だが、入口が見当たらないのだ。

若干方向音痴のレンと完全方向音痴のエリオットは、どちらが悪いという以前に二人で迷子である。

「…………窓から入るのが、一番では？」

「それはちよつと待て」

レンはエリオットが止めるのを無視しながら、窓枠に手をかける。レンは、この確実に泥棒と間違われるフラグを踏みながら、中に入った。

「おい、人の話を聞いているのか！！」

「聞いてない…………」

若干会話が成立する二人。

レンの後を追って、窓から建物の中に入ったエリオットが見たのは…………。

「ここは…………ロッカー室か？」

「もしくは、更衣室って行ったところだな」

レンとエリオットは、レンが言った『更衣室』という単語に、かなりの冷や汗を流しながら、何も言わずに外に出ようとしたところ……………入口が開いた。

入口が開く瞬間。

レンとエリオットは、お互いに咄嗟の判断で向かい合ったロッカーに隠れた。

彼ら二人がロッカーを閉めると同時に、青い色の髪、短めな髪型をしたボーイッシュな少女が入ってきた。

入ってきたのが女の子であったことを確認したレンは、エリオットに念話で話しかける。

《ヤバイ！！　ここ完璧に女子更衣室だ！！》

焦るレンは、エリオットに出来るだけ大きく聞こえるようにピンチを伝えた。

だが、エリオットの回答は、レンがドン引きするくらいのものであった。

《折角だし……もう少し見てようぜ！！》

エリオットの、馬鹿らしい声を聞いて、《おい！！》と念話を飛ばすが無視される。

その間に、入ってきた窓は閉められ、同時にカーテンも閉められる。

おいおい……マジで俺、犯罪者になるじゃねえか……

レンは、そう考えながら、目を瞑り、この現場での打開策を考える。

そんな中で青髪の少女は、エリオットが入っているロッカーの前に立った。

《レン、助けてくれ！！》

その声を聞いて、目を開けたレンは、少女がエリオットのロッカーを開けようとしているのを見て、冷たくこう返した。

《諦めろ、自業自得だ》

そう言うレンは、ロッカーので十字を切る。
それと同時に、ロッカーは開けられた。

……。

数秒の静寂と目線が見事合っている、銀髪と青髪の少年少女……。

「や、やあー!!」

若干自暴自棄気味のエリオットは、少し焦りながらも、いつもと変わらぬ声色で少女に話しかけるが……当然のごとく。

「きゃあああああああああああー!!」

少女の悲鳴がこだました。

その少女は、悲鳴を上げると同時に、エリオットに向かって、恐ろしい速度で右ストレートを打ち出す……。

「危なっ!!」

エリオットは、少女が繰り出した右ストレートを、ロッカーから飛び出す事で回避すると、反対側のレンの入っているロッカーの前に来て……。

「ここにいるのは、俺だけじゃない……こいつもいるぜ」

レンが入っていたロッカーを開けた……。

「貴様、何という事を……」

レンがエリオットを呪うように言葉を紡ぐと同時に……。

再度、扉が開いた……。

入ってくるのは、オレンジ色の髪をした、ツインテールの少女。
入ってくるなり、レンと目が合い。

「スバル、何を騒いで……」

「……………」

「……………」

目が合うと同時に思考が停止する二人。
物凄く重い空気の中でレンは、

「お嬢さん、今日は天気がとてもいいですね……」

「ええ……………」

「……………」

四人がいる部屋の空気は、完全に固まった。

何時まで経っても打開策の浮かばない状態、この状態で確実に刑務所行きを感じ取ったレンは、

エリオットを掴んで、全力で窓から飛び出した。

「逃げるぞー!!」

レンはそう言うと、エリオットを置いて全力で走り出した。

エリオットも、部屋の中にいる一人が出てこないうちに……。

「待ってくれ!!」

と言つて駆け出す。

逃げ出した二人を見つめていた、少女二人組……スバルとティアナは冷静な判断を取り戻して、誰かに念話をする、逃げる二人を追いかけた。

レン&ラファイン

「レン・クロフィールと+ のオールナイト全時空!!」

レン

「はじまりました、全時空……」

ラファイン

「なんで僕が出だしから？」

レン

「それは……あれを見ればわかる」

レンが指を刺した先には…………ジュリアに正座をさせられながら説教を受けているエリオットの姿があった。

ラファイン

「……………何をやっているの？」

レン

「痴話喧嘩……………」

ラファイン

「ああ、今回は何が原因？」

レン

「このビデオ……………」

レンが示したのは、年末慰安旅行！！　IN不死鳥温泉！！！！と書かれている。

ラファイン

「何があったの？」

レン

「バルトさんとエリオットが、ほかの変態たちと一緒に風呂を覗こうとしたんだ……………」

ラファイン

「ああ、自業自得か……………」

レン

「時間の都合により……痴話喧嘩の内容は、次回とさせていただきます」

レン&ラファイン

「では!!」

第三話『機動六課出向』（前編）（後書き）

痴話喧嘩の行方は！？
次回の更新を待て！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3396j/>

shadow,lf もしも奇跡が起きたなら。

2010年10月9日22時00分発行